女教訓

古世百人一首

目録

和歌三神之像并由来記
古今六歌仙之像同和哥
三十六歌仙之像同和哥
女中諸花抄一生之嚢草
女中諸孔秋容絃圓一繞
女孫筆法式并貝殼史法
增補御新言葉女柔和草
諸和歌集後書七夕之旅
女中教訓貝杓經同絵巻
三夕著之和歌并景容圓
百人一首人名和歌讀曲
同又撰之秘歌仙者名

108102

跡見女子大図書館蔵書

萬世百人一首花文臺

和歌三神之由来

第一住吉大明神は神功皇后三韓をしたがへ給ひし時海上に現し給ひ住吉の社に鎮座ましまして和歌の道を開き給ふ

第二玉津嶋大明神は聖武天皇の時紀の国玉津嶋に鎮座ましまして和歌の道を開き給ふ

第三人麿大明神は聖武天皇の時石見の国柿本の郷に鎮座ましまして和歌の道を開き給ふ

しより紀ノ和歌の浦よ勅撰

まいゆけいとりや

立ノ人ま海こも山世ま

わくこまんを

世りしき和歌けし波

第三人麿大明神石見乃国

治家名とゝ人の園の柿れ本の

ちて小児忽絶と立居ゝ其

名ノ人ゝ小児答て

我ハ父母も住所もかし和歌

もして住歌ゝとこ浦小橋の名ハ

のうに捨産もしゆと

かのぐしあしたうの

ゆくあをしておりし人

あと二人和歌の三神とゝのゝまを

山乃ゝたゝかむ人公常に世ノ

神の空を恵ふけんと名ゝけく

常世ノ空ノ人生をゝ

六歌仙

僧正遍昭

小野小町

大伴黒主

三十六歌仙之圖

三十六人の歌の仙を撰び結ひ一位卿大納言公任卿か程古の歌ひ人をあげて三十六人とえらびあひ是を三十六歌仙と云り其後覚盛法師か右に漏て十人撰ひ出せり

天智天皇

秋の田の
かりほの
庵の
苫を
あらみ
わが
衣手は
露に濡れつゝ

左 柿本人麿

右 紀貫之

持統天皇

春すぎて
夏来にけらし
白たへの
衣ほすてふ
あまの
かぐ山

左 凡河内躬恒

柿本人麿
山部赤人
猿丸太夫
中納言家持

安潟仲麿

わがのうら
なれば
かすがの
みさきより
いでし月かな

右 紀友則

久方の
月の
出しかたの
なまし
川の
船人
友まし
川の
船人

左 猿丸太夫

奥山に
もみぢ
ふみ
分
なく
鹿の
こえ
聞
時
ぞ
秋
は
かなしき

右 小野小町

あはでの
夜の
ふけ
ぬれば
あかつき
の
つれなき
物
は
人
の
ことの
葉

左 在原中将業平朝臣

ちはやぶる
神
よ
の
ことも
聞
かず
たつた
川
の
水
くくる
とは
を

右 中納言兼輔

みかの
原
わき
て
流
るる
いづみ
川
いつ
見
き
とて
か
恋
しかる
らん

左 中納言家持

鵲
の
渡
せる
橋
に
置
く
霜
の
白
き
を
見
れば
夜
ぞ
ふけ
にける

右 小野小町

花の
色
は
うつりにけ
りな
いたづらに
我
身
よ
ふる
ながめ
せしまに

左 在原中将業平朝臣

蟬丸

これや
この
行も
帰も
知
れ
ぬ
逢
坂
の
関
は
人
の
ことの
葉
の
あふさか
の
関

参議篁
和田のとり
いけ潟
うきてこぎ出ぬ
人とはつげよ
あまの釣舟
僧正遍昭
天津風
くもの
かよひぢの
吹とぢよ
乙女の姿
しばしとどめむ
右 藤原高光
かくばかりへがたくみゆる
世の中よ
すみ染の月の舟
今日ぞ
別れて
左 源公忠朝臣
右 壬生忠岑
月の出
のこの小松の
ありさまは
子の日のうらにぞ
今
左 源宗于朝臣
右 大中臣朝臣
はるの
つきはあれど
春ぞ
左 源信明朝臣
湯成院
たくぶ
みよりの
おつる
乃川
高
つりて
湖
河原左大臣
みちのく
たのも
しらず
誰ゆえ
思ひ
我ならなくに

光孝天皇

天つ空
雲の
いでくる
我衣手に
雪は降りける

右 源重之

風をいたみ
岩うつ波の
おのれのみ
くだけてものを
思ふころかな

中納言行平

立ちわかれ
いなばの山の
峰に生る
まつとしきかば
今かへりこん

右 源信明朝臣

こゝにさへ
世にあるものを
わびしらの
なきこゑ
たえずやあらん

右 源順

水の面に
てる月
かずかずに
なりぬ
なるらん

右 菅原清正

天はら
ふみ
あのの
なるの
なるかな

右 菅原敏行朝臣

風の音
ぞ
秋
なりける
やふ

右 菅原道真

わもひ
わび
ぬれば
いとさへ
ぬれ
ぬる

東京業平朝臣

ちはやぶる
神代も
きかず
たつた川
からくれなゐに
みづくくるとは

菅原敏行朝臣

住の江の
きしによる
なみ
よるさへや
夢のかよひぢ
人めよくらん

伊勢

難波ごと
あしの
ゆめ
なほ
なほつぐ
このよを
すごして
よしやな

右 清原元輔
秋の夜の
ゆめ
ちぎりかな

左 坂上是則
みよしの
山の
あさぎり

元良親王

わびぬれば
今はたを
なれ
なほ
なほ
なほ

大江千里
月見れば
物そこはかとなく
かれ
つゆの身
ひとつの
秋にはあれど
右 壬生忠見
やすらへも
かすの耶紙
菅家
大のそびへ
ねさやこ
あらし
と
向山
みぢ
神ろまふく
右 中務
女諸禮鑑
三條右大臣
名
あ
ぢ
山の
人
れて
ひの
貞信公
少倉山
みぢ
架
今
神幸まさなん

中納言重輔

源宗于朝臣

坂上是則

名だかき歌人
三河の
月と
みるまでに
よしやさらでも
世捨る法師

是ゆきの法師たのひざとかー右のあしのうらをも
右のあしのうらにてーこれをあしのうらにてー
ゆきのあしのうらにてーこれをあしのうらにてー
○事を言ひて安部より膳所おきの中ゆくとり

春道列樹

山の風の
けしきは
さびしも
あれもみぢ
うりの家

りんろう食ての
りんろうのけと
ゆきかーこそ
ニそーもてひて

紀友則

久かたの
ひかりの
のどけき
春の日に
しづこころなく
花のちるらん

○番ハ二ツ折ホシテ中ハ紙ヒトヘベー○板ノ
ウヘハ右ノ手ヲ中ヘ入ルノ紙ヒトヘノ
うーてやれ紙ヒトヘノ中ヘ入ルとく

けをとり
ゆびて
くべ

菅原興風

誰をかも
知る人に
高砂の
松もむかしの
友なりける

紀貫之

人をいざ
心も知らず
故郷は
花ぞむかしの
香ぞ昔しる

清原深養父

夏の夜は
まだ宵ながら
明けぬるを
雲のいづこ
月やどるらん

文屋朝康

白露に
風の吹しく
秋の野は
つらぬきとめぬ
玉ぞちりける

中納言

忘れじの
行末までは
かたらじ
人の命の
惜しくもあるかな

桑蓬等
あさぢはの
をちこち
しのぶもじ
ずりたれか
人のせいき
平兼盛
忍ぶれど
色に出でにけり
我が恋は
物や思ふと
人の問ふまで
壬生忠見
恋すてふ
我が名は
まだき
立ちにけり
人しれぬ
思ひそめしか
清原元輔
契きぬ
袖を
絞りけり
末の
松山
なみこさじとは

中納言敦忠
のひんその
後ろ姿
くるまだ
ひとりの紙
ねりはざるとくり

中納言朝忠
あ事の
さくそ
ちくい
人をも
見ぬを
うらみぢまし

○人のあるところもかくうつひたく後へうりさまを天
ぐひとりのみうえをうつりそうれをあげざるふせのとき
はくぐひとりそうふこれりをーなくゆべー
○ぜんとをくあひ先あゆそちちかりちまをふゆそ

謙徳公
あれ
長くをいつ屋た
人を神も
わしで
身の
いろぶふ
なりぬだたうゆ

雪の降ぬ忠
ゆうふ紙
ちまる
あびく人
ひろと
そ
ゆく
ひ和も
ちうね
雲のうちれ

惠茂法師
源重之
風をいたみ
岩うつ
波のおのれ
くだけて
物をおもふ
ころかな
大中臣能宣朝臣
御垣もる
清士の
火
焚
かがり
ひるはきえつ
つ
ものをこそ
思
菅原義孝
君がため
惜しからざり
命
さへ
ながくもがと
祈りけるかな

藤原実方朝臣
ゆくとぶ
えやの
いでさの
りし
ぐさ
さ
ちぐ
ゆる
ひと
○清慎横笛の譜二枚ありくべし月琴
那波くべし三人二枚ありあ小書して一枚と三
味ありくべし月琴
○名家のうの字成かにきれ字をまぜふ
菊原道信朝臣
昭れまぐば
ちり
なぐら
ぬ
ぬ
ぬ

大納言公任
滝乃音は
久しく
聞えど
名こそ
なほ流れて
聞きつるかな
和泉式部
あらざらむ
この世の
思ひ出に
今一度
逢ひ見む
ものかな
紫式部
めぐりあひ
て
見しや
それとも
わきぬまに
雲がくれ
にし
夜半の
月かな
大弐三位
有馬山
いなの
笹原
風吹
いでそよ
人を
忘れやは
する

赤漆の文箱

小式部内侍

○上の貝縁の畳は貝縁の事なり畳貝縁と云なり

侍従大納言

清少納言

左京太夫道雅

今はたゞ思ひたえんとばかりを人伝てだにいふよしもがな

赤おまる　名りす　くろこう　おひしゝゑ　もりど

ごまめと　湯のこと　大根と　紙を　漬物と

ふこのだう　ゆのあさ　やくもの　いちんこう　ゆきく

つさと　ぎと　赤ふとんと　人参を　法を

おおり　ぶりゝゑ　よるのこの　めもとこう　ひつろう

権中納言定頼

朝ぼらけ有明の月かと見るまでに吉野の里に降れる白雪

一切の奥と　紙を　鯖と　いっしと　ひとれこと

おまるの　おさろう　たりど　ありそ　えもく

ちゝこと　ぐんごと　豆腐を　ぐんぐくと　かさ紙を

ちゝこと　いしく　おうだ　おでん　おえだ

桐模

かたされ　神ぐり　わるわを　えこよ　くらえん　見こと　わくれ

前大僧正行尊

もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし

おまる　おさろう　たりど　ありそ　えもく

周防内侍
春の夜の
夢ばかり
たわやめ
ひとたわ
なれそめ
たれ
三源流
さるまつ
何ぐで
うれ世
あら人
こひしうべき
夜半もしつき
よれ
絵図法師
あり
ぬく
三笠の
山の
あら
ぢは
やまと
川の
みきなりけ
良暹法師
ちぎりきな
かたみに
袖
しぼる
なれば
秋の
ゆふぐれ

大納言經信
源俊頼朝臣
藤中納言通房

藤原基俊

ちぎりおきし
させもが
露を
いのちの
あはれとも
ながらへばこそ
かくばかり
つれなかりけり
わすれぬる
なかの
ちぎりを
たのみ
ばかり
ながらへ
ぬる
ものを

法性寺入道前関白太政大臣

わたの川
あまの
つり
ぶね
なれば
久しき
人の
ねよ
まぎ
れて
ぬる
しらなみ

崇徳院

瀬をはやみ
岩にせかるる
滝川の
われても
すえに
あはんとぞ
思ふ

源兼昌

淡路島
かよふ
ちどりの
なく
声に
いく夜
ねざめ
ぬ
須磨の
関守

左京左史弘綱
姫風
きるの
こくま
りれ出る
月れ
新乃
さくあき
特賢院
みぐらせ
ムもたび
ムろこび
みぐれて
けさは
物をこそ
さへ
女
紀女牛は四海を肝要とすべきなり男はあらそはれども
慈容の二つと
訓
慈
容
徳川家康
徳川寺左大臣
ちくぜん
ちくぜん
なぐ
むもび
そこ
首的
月ぞ
のこ秋
道園法師
ちひろ
そも
命い
ある
ゆ
うき
そこ
ゆ
みぐ
なるとり

世の中よ
なれ
山のわかを
薬師寺清胤
今はこひ
西行法師
俊恵法師
月やあらぬ
とはるかこそ
わがなげかるる

親鸞法師
ひろさわの
ほうも
まさご
ひね
桜の葉
寄さらのごる
妹のタゞれ
恋ゝ
しるべき
身をはく
一夜沙
り孫
わけ
難波江の
空あつ
院分者
武子間親王
五の孫よりこなべ
さこねなごろへ
ゝのごろ
よろり
もぞ
敦冨門院大輔
見ぬ
ぞ
わまの
袖ぶ
ねまぐ
ぬ
ぬ

後京極摂政前太政大臣

二條院讃岐

荒大僧正恵圓
わかあれく
うき世の
民こ
ろ
れ
家ろう松よ
そこうち袖
八道荒大改大佐
荒きそ袖
あしの
庵ろ
雨
ゆき
ゆ
ゆめ
なるけま
檀中納言定家
ふね人を
ゆ
ゆ
ゆ

後鳥羽院

人をはぐくむ
わがきみの
世をおさめ
ゆめ
ゆめ

まことに世をたもつ人の御ことばとかしこみ奉りて、あしき世ひろきいきをろしくの人をはぐくみ給ひ、家の角をとりこうしろくさかりあるとかさうも御ゆめ、ながきすれいかりはの清きすれいかりはの清きすれいかりはの清き

塩海野大学の中
所き山

x·rite ColorChecker® Color Rendition Chart